



## 平和の建設

堀内義光

戦争は悲惨なものである。幾多貴重なる人命とそして國粹とも云ふべき一國の美を飾る歴史的記念物と雖へども、共に殺傷と破壊の運命を免れぬのである。然して之に要する戦費の莫大なる、到底單純なる昔のそれに比すべきでない。随つて經濟界の動搖より來る生活難は、思想の惡化となり、延いては國家滅亡に至らしめる等、數へ來れば戦争は實に慘鼻の極である。若し世界に戦争なるもの無く、國力の向ふ所を以つて、悉く文運に資するを得ば、如何に人生は幸福なる生活を爲す事が出來やうか。此れは獨り宗教家、哲學者のみの思ふ所にあらず、誰れしも思ふ所にして、然かも實現の困難なる、常に不可能事を以つて稱せられて居つたのである。見よ從來屢々開催せられたる萬國平和會議の座場に於ける、殆んど各國代表者の惱裡を絞りに絞りたるも遂ひに、世界の平和を握るべき名案は吐き出されなかつたのである。今でこそ軍備縮少の如き不誠意なりとの非難を蒙りつゝも、稍や實行の途に就き居れるも、彼の歐洲戦争以前の如きは、各國其皆他國の誠意の有無に疑惑を抱き、爲めに何時も抽象論に終つたのである。國際法の如き幾何の權威があらうかのそもく人類に發生するの罪惡を防ぐは法律なる文字が防ぐにあらず、其背後に於ける警察なる威力に依つて初めて効力を生ずるのである。然るに世界各國に於いて各々他國の侵掠と云ふ一種の強盜を威壓し得る程の威力ある警察が何處にあらうか。既に無しとすれば即ち他國の暴は、自から暴で防ぐと云ふ、所謂才に訴えるの大慘劇は行はるのである。

人生の此の世に在る、ろも何にが爲めに生れ、何故に生きて居るのであらうか。戦争の爲めか、將又平和の爲めか。此の疑問は解決すべくして、未だ解決せられて居らないのである。人は如何なる考へを以つて世を渡りつゝあらうか。人間としての責務なるものを覺醒したであらうか。其覺醒とは平和なる世界、理想の國土を實現するのを云ふのである。此の理想を優勝劣敗の現實に與へんとするには、どうしても世界を統一して此の戦争を除かなければならない。然らば物質的か精神的か、何れに依つて統一すべきか。ナポレオン一世の企てたる世界統一は志未だ達せざるに先だちて破れ、英雄に不可能なる文字無しと云へる彼れの全勢も全く一時の夢にて哀はれ最後はセントヘレナ孤島の一隅にて「嗚呼余は遂ひに猶太亞の大工の子に及ばざりしか」と歎息せしめ、果敢なき人生を恨みつゝ、黃泉の露と消えたのである。近かくは獨帝カイゼルの如きも皆其類である。物質的統一が斯くの如しとせば、此れを精神的統一即ち宗教に求めなければならぬ。信者の數に於いて今や我が佛敎に匹敵するの勢力を有する、キリスト敎も科學の進歩と共に因果の理に外れたる忘説なりとの斷定を下さるゝに至れば、此れも亦前途は推して知るべしである。然るに我が佛敎は如何にと見るに法華經以前の敎は佛自から法華の開經たる無量義經に「知<sub>レ</sub>諸<sub>ノ</sub>衆生<sub>ノ</sub>性欲<sub>ノ</sub>不同<sub>ナリ</sub>」性欲不同<sub>ナリ</sub>種々<sub>ニ</sub>説<sub>ク</sub>法<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>之<sub>ヲ</sub>方便力<sub>ニ</sub>四十餘年<sub>ニ</sub>未<sub>ダ</sub>顯<sub>ズ</sub>眞實<sub>ヲ</sub>と云はれて居るから、爾前の經は格外とするも法華經に於いては世界人類を統一救濟するの意を最つとも強く示して居る。譬諭品に「今此<sub>ノ</sub>三界<sub>ハ</sub>皆<sub>テ</sub>是<sub>レ</sub>我<sub>ガ</sub>有<sub>ナリ</sub>其中<sub>ノ</sub>衆生<sub>ハ</sub>悉<sub>ク</sub>是<sub>レ</sub>吾<sub>ガ</sub>子<sub>ナリ</sub>而<sub>テ</sub>今此<sub>ノ</sub>處<sub>ハ</sub>多<sub>ク</sub>諸<sub>ノ</sub>患難<sub>ニ</sub>唯我<sub>レ</sub>一人<sub>ノ</sub>能<sub>ク</sub>爲<sub>ス</sub>救護<sub>ヲ</sub>」此一視同仁の眼を以つて我が子なりとして統一し、普邊平等に救世濟民たるの實を擧げんと努められたのである。畏くも明治天皇に於かせられても

四方の海皆はらからと思ふ世に

なご波風のたちさわぐらん

と仰せになつて戦争を御歎き遊ばされたのである。日蓮に依りて紹介せられたる、佛陀の法華經は實に世界統一平和建設の方法を敎へられたるものにして、本宗の最高目的とする所は全く此處に存するのである。西洋の或る學者は人類の道德が漸次に進歩し、世界に於ける個人個人が正義と積極的博愛と消極的博愛とをそし

て合理的自愛との四條件を實行し行きて、遂ひに全世界の人類が皆悉く此の四條件を實行するに至るならば其時は吾人人類が最大幸福を共樂すべき理想實現の時である云ひ居ることの事なるが、此れを本宗より見る時、前四條件實行とは即ち妙法蓮華經の五字を以つて全世界を統一したるの時なるべしと確信するのである願はくば平和に生きんとするの人々各自が應分の力を盡し以つて妙法蓮華經の五字に統一し、此の理想實現の一日も早からん事を切に希望して止まぬのである。



## 慈 悲 に 就 て

吉 川 啓 善

慈悲に就いて云ふ表題は、實に大きい廣い意味を成してゐます。けれど、私は此處に於ては唯だ愚感の一端を述ぶるのみであります。凡そ吾等人間は勿論畜類に至るまで、何れも、何等かな慈悲を蒙らないものはありますまい。その慈悲には、或は佛の慈悲、或は祖先の慈悲、或は師の慈悲親の慈悲等種々あります。亦此れは佛敎の方面より申しまして、普通一般から云ふても、誠に離れない自然の情であります。

處で佛様の慈悲は如何様であります。既に吾等が知つて居る通り、大聖釋迦牟尼世尊は限りなき、一切衆を憐み給ふて、『三界の衆生は悉く是れ我が子なり』と。仰せ給ひ、佛様は大慈大悲の御意より吾等の親となつて、而も『唯だ我一人のみ能く汝等を救ひ護る』と。申されて、末世末代の衆生を御法の岸に救ひ下されたではありませんか。亦親の慈悲の厚き事は現に吾等が痛切に覺する處であります。斯様に森羅萬衆皆自然の慈恩に浴せないものはありません。偕て此等の慈悲を心から謝し、此れに對して何物かを自覺する者が幾許ありません。嗚ぞ少い事です。私が丁度京都に在つた時、恩師に導びかれ度び々々宗祖大聖人の苦